

町史編さん室だより



令和9年度の安平町史発刊にあたり、町史編さん作業の進捗状況などをお知らせします。

問合せ 総務課町史編さん室 ☎ 2511

今回は、明治三十九年四月一日に施行された二級町村制時代における安平村の村勢概要について紹介しました。今回はこの時代における主要産業の特徴的な動きについて紹介します。

第四回

二級町村制時代の産業事情



農業

二級町村制時代の初期である明治末期には、村内各地の入植者も次第に増え、農地の開拓も著しく進展してきた。一方で、この時代は大地主所有地の小作制度による農業経営が多く、大小の地主が小作農家を入れて耕作をさせており、一戸当たりの耕作面積も極小である上、火山灰地という不利な条件とこの地方特有の気象条件などにより、米の反当収量も少なかったことから、農業のみで生計を維持することは困難であった。このため、大半の農民は、当時盛況であった林業に従事し生活費の大部分を得ており、農業は副業的に片手間仕事として行われていた。

また、大正二年には、春以降の天候不順による低温に加え、集中豪雨や暴風雨の襲来により河川が氾濫し田畑が冠水、さらに初霜、結霜、薄氷などの悪条件が重なり、ついに米の収穫が皆無という未曾有の冷害凶作であった。

このような中、第一次世界大戦の影響による好景気は農産物価格、特に米価の暴騰を招き、全国各地に米騒動も起こる状態であった。安平村にお

年次	大正11年	大正10年	明治44年	明治41年
田	695ha	407ha	345ha	194ha
畑	711ha	985ha	1,119ha	1,061ha
合計	1,406ha	1,392ha	1,464ha	1,255ha

田畑作付面積の推移（早来町略史）

いても明治時代以来の林業景気が原木の減少によつて次第に下火となり、農民たちは他の農作物に比べて水稲の作付けがすこぶる有利であるとして、水田開発が急速に進められ、明治四十一年の水田作付面積一九四ヘクタールが、大正十一年には六九五ヘクタールと飛躍的な増反を見せている。

畜産業

この時代における安平村の馬産業は最盛期にあり、村内各地の大小牧場には多数の馬が飼養されていたほか、農耕で馬を使用する者が次第に増え、また、当時盛況であった林業において、木材搬出などに従事する者も多く、一般農家においても馬の飼養が盛んになるなど、明治末期の馬飼養頭数は千五百頭を超え、馬産地安平村として全道的にも著名となった。

一方、安平村における牛の飼養は明治時代から始められていたが、当時はまだ酪農というほどのものではなく、広大な原野を放牧地として牛を飼養し、もっぱら生乳の市販を行う搾乳業が主であった。

林業

村内では戸長役場時代に引き続き、牧場目的をもつて大地積の国有未開地貸付を受ける者が続出し、事業を成功させるために大木が伐採され、製材された角材や鉄道枕木などが最寄りの停車場に搬出された。これらの木材搬出のため、各地から馬搬の関係者たちが出稼ぎに入り込み、村内市街地はにぎわいを見せ、飲食店や一般商店も大いに繁盛した。

このような中、これらの木材を各地に移出していた三井物産合名会社は早来に出張所を置き、明治三十七年には早来―厚真間に馬車鉄道を敷設して、厚真方面からも盛んに製材された木材や鉄道枕木が運搬され、早来停車場前に山積みされた。

この時代は木炭の生産も盛んで、安平村の木炭生産額は本道木炭業界の首位を占め、安平村からの木炭出荷量の増減は、札幌、小樽方面の木炭相場を左右する状況であった。

工業

日露戦争による好景気も戦争の終結とともに景気が後退し、明治末期には安平村にも次第に不況の波が押し寄せ、特に工業界は灯の消えたように著しく衰退した。

明治四十三年には、追分骸炭製造場がコークス需要の低調とともに会社の経営不振などにより操業を中止し、その後、操業を一時再開したもの、第一次世界大戦後の不況と施設の老朽化などの理由によつて大正十一年に閉鎖され、二〇年の歴史に幕を閉じた。

また、明治四十四年には早来製炭所が、製造していたタンニンエキスの原料となるかしわ樹脂の欠乏により、工場を閉鎖して、十勝国池田（現・池田町）に新工場を建設し移転した。

一方、明治三十八年に設立した南北石油株式会社は、厚真村古志子別に有望な鉱脈を発見し、ここで採掘した原油を早来に運搬して石油にすべく、翌三十九年に南北石油株式会社早来製油所を建設し、一日あたり約一・八キロリットルの原油を精製した。